

ダニエル・デフォー

『ペストの記憶』(13)

訳 武田将明
Takeda Masaaki

家屋が閉鎖されているあいだ、ときどき監視人に暴力がふるわれたことはもう話したよね。でも軍隊はどうしていたのか、というとなんなものはどこにもいなかった。あのころ国王に属していたわずかな近衛兵は——その後は比べものにならないほど人数が増えたけれど——宮廷と一緒にオックスフォードに行くか、遠い田舎に駐屯するかで、バラバラになっていた。小さな分隊は例外で、ロンドン塔、そしてホワイトホール宮殿で任務についていた。でもそれもほんのわずかな数だった。塔では守衛^{ウォーダー}¹と呼ばれる人たちが国王衛士^{ヨーマン・オブ・ザ・ガード}とおな

¹ 守衛 (Warder) とは、ロンドン塔を守る兵士のこと。正式には “Yeoman Warder” と呼ばれるこの役職はヘンリー七世が即位してチューダー朝を創始した 1485 年に創設された。17 世紀後半から、彼らは「ビーフィーター」(Beefeater) の愛称で呼ばれるようになった。(Mullan 233) 国王衛士 (Yeoman of the Guard) は国王を護衛する兵士であり、こちらも 1485 年に設けられた。

じ制服と帽子を身に着けて門前に立っていたけれど、ほかに衛兵がいたのかよく分からない。ただ、ヒラの砲兵が二四人と、武器庫の管理を命じられた兵器係という名称の士官はいた。じゃあ訓練を受けた民兵² はというと、誰ひとりとして集まる可能性はなかった。ロンドンなりミドルセックス州なりの統監^{ロード・ルーテナント}がドラムを鳴らして民兵を呼び集めたところで、どんな危険を冒しても馳せ参じるような兵士はいなかったはずだ。

このせいで監視人が軽く見られてしまい、きっとその分、彼らに向けられる暴力が激しくなったんだ。ぼくがこの話をしたのは、次のことを指摘したいからだ。こんなふうに、人びとを外に出さないよう監視人を配置しても、第一に効果がなく、力づくで、あるいは策略によってどんどん脱走していたこと、それも何度でも、およそ好きなだけやっていたということ。そして第二に、こうして脱走できた連中は、たいてい病気に感染していて、絶望のあまりあちらこちらを走りまわって、誰彼かまわずうつすのをなんとも思わなかったということ。おそらくこのせいで、感染した人びとはおのずから他人にうつしたがるよ

² ペスト流行時、イングランドに常備軍は存在しなかった。その代わり、十六歳から六十歳のプロテスタント男性は民兵になることができた。州の統監 (Lord Lieutenant: ただしロンドンの場合は市街地の首長 (Lord Mayor) と長老会議) が各地の民兵団を統括した。いま「訓練を受けた民兵」と意識した “Traind-Band” (trainband) は、民兵の中でも特に選抜されて軍事訓練を受けた集団を指す。1662 年に州における選抜制度はなくなったが、ロンドンの “Traind-Band” は 1794 年まで存続した。(Mullan 233; Backscheider 60)

うになる、という前に述べたうわさが生じたんだ。でも、こんなうわさは事実無根だった。

しかも、ぼくは事実をよく知っているし、数多くの例を見ているから、善良で、義理堅く、信仰の篤い人たちの話をいくつも語ることができる。こういう人たちは、病気に感染してもほとんど他人にうつすことはなく、それどころか相手の安全を願って、家の者たちさえ近づくのをお許さなかった。万が一にもみんなを病気にさらし、感染して危険な目に遭わせる原因となつてはいけなからと、一番の身内とも会わずに死んでいったんだ。だから感染した人たちが他人を害しても気にしない事例があったとすれば、きっとなかにはこんな人も(多数ではないにしても)いたのだろう。つまり、病気にかかってから、あのように閉鎖された家から脱出したものの、食料とか娯楽に飢えるようになったので、どうにか症状を隠そうと努め、そのせいで不本意ながら無知で不注意な他人が感染する原因となった人たちもいたんだ。

これが一つの理由となって、ぼくがあそこ信じ、実はいまだに信じていることがある。いままで見たように、あんな力づくで家屋を閉鎖し、人びとを自分の家に引き止め、いやむしろ監禁するのは、結局のところほとんど、あるいはまったく役に立たなかったと。それどころか、あれは有害でさえあった、というのがぼくの考えだ。だって望みを断られた人たちがペストを抱えたまま外をふらつくよう仕向けたんだから。あれがなければ、この人たちはベッドの上で静かに亡くなっていたはずだ。

ここでぼくはある市民のことを思い出した。この人はオールダーズゲート通りかその辺りにあった家をやはり脱走し、イズ

リントンに向かう道を北上しながら、まずエンジェル亭に、その次に白馬亭に入ろうとした。³ この二件の宿はいまでもあって、当時とおなじ看板を出している。ところが彼は宿泊を断られてしまった。そこで次に斑牛亭^{まだらうし}に行った。この宿もまだおなじ看板を掲げている。彼は宿の人たちに「一晩だけ泊めてください」とお願いした。「リンカーンシャー州⁴に行くところです」と目的を偽り、「自分は健康そのもので感染している心配ありません」と断言した。しかも当時はまだ、そちらの方向には感染があまり広がっていなかった。

宿の人たちは彼にこう話した。「ご用意できる部屋はありませんが、ベッドならば屋根裏部屋にひとつございます。そのベッドも一晩しかご用意できません。明日には家畜を売り歩く人たちが来ることになっているのです。そこでよければお泊まりいただけます」「そうしましょう」彼は答えた。そこで奉公人が呼ばれて、蠟燭を手にとり彼と上に行き、部屋を見せた。この人はとてもよい身なりをしていて、屋根裏に寝るのに慣れた人で

³ エンジェル亭は、ロンドン市街地の北西に広がるクラーケンウェル教区に実在した歴史のある宿。白馬亭は諸説あるが、文脈上クラーケンウェルよりも北にあるのが自然なので、「今日のリヴァプール街(18世紀にはブラック街と呼ばれていた)にあった宿」という John Mullan の説が正しいように思われる。リヴァプール街(Liverpool Road)は地下鉄エンジェル駅の付近にあり、クラーケンウェルとイズリントンのあいだに位置している。次に出てくる斑牛亭はイズリントン付近にあり、サー・ウォルター・ローリーが一時所有していた、あるいは滞在していたという伝承を持つ。(Backscheider 61; Landa 294; Mullan 217, 219)

⁴ イングランド東部に位置する州。

はなさそうだった。いざ部屋にくると深いため息を漏らして、奉公人に言った。「このような部屋で寝たことはあまりないのですが」しかし奉公人は、「これよりよいお部屋はございません」とふたたび断言した。「それならば、我慢するとしましょう。最近は何日も恐ろしいけれど、ここに耐えるのは一晩だけなんだから」こう言って彼はベッドの端に腰を下ろし、「温めたビールを一ポイント持ってきてください」と女(だったはず)の奉公人に頼んだ。そこで奉公人はビールを取りにいった。ところが宿でなにか騒ぎがあって、どうやらこの女性はほかの仕事をしなくてはならず、用事が頭から抜けてしまったらしい。だから彼女はもう彼のところに上がっていかなかった。

その翌朝、あの紳士の姿が見えなかったので、彼を上案内した奉公人に宿の人が訊ねた。「あの方はどうした？」彼女はハッとした。「いけない、あれから放ったらかしでした。温めたビールを持って来るよう頼まれたのに、忘れてしまいました」そこでこの奉公人ではなく別の者が呼ばれて彼の様子を見に上がった。部屋に入ると男の人が紛れもなく死んでいた。ほとんど冷たくなって、ベッドの上に伸びていた。服はむしり取られ、口はパツクリと開き、目も開いたままで底なしの恐怖を湛え、ベッドの敷物を片手で固く握っていた。この様子から女性の奉公人が部屋を後にしてすぐに死んだのは明らかだった。だからたぶん、彼女がビールを持って上に行っていれば、ベッドに腰を下ろしてから数分で亡くなった男の人を発見していたはずだ。大変な恐怖がこの宿を襲ったのは、誰でも分かるだろう。病気の心配などないところに、こんな災難が降りかかったんだから。おかげでこの宿に病気が持ちこまれ、周辺の他の家屋にもたちまち広がってしまった。この宿だけで何人が死んだ

のかは覚えていないけれど、最初に男の人と屋根裏に上がった女の奉公人は、恐怖のあまりすぐに病気で倒れたはずだし、ほかに何人もそういう人がいたと思う。というのも、この前の週にはイズリントンでペストによる死者が二人しかいなかったのに、次の週には全部で十七人が亡くなり、そのうち十四人の死因がペストだったからだ。これは七月十一日から十八日の一週間の出来事だった。

ある非常手段に訴えた家もあった。これは運悪く感染者の出した家では、少なからず取られた手だった。それがなにかというと、疫病が広がりだしたと見たらすぐさま田舎に逃げ、親しい人びとの許に疎開するというもので、たいていは近所の人か親類の誰かを捕まえて元の家を託し、家財の管理などを頼んでいた。なかには元の家が完璧に封鎖されていることもあった。ドアには南京錠がかけられ、窓にもドアにも松の厚板が釘で打ちつけられ、担当の監視人と教区の役人が点検するだけでよかった。でもこんな家は少なかった。

市街地と郊外(これは市街地の外の教区とサリー⁵つまりサザークと呼ばれるテムズ川の南岸を含む)で住人から捨てられた家が少なくとも一万はあると考えられていた。このほかに下宿人や個別の事情で他人の家から避難した人の数も加わる。す

⁵ 現在のサリー州はサザークよりずっと南にあるが、これはロンドンの発展とともに元はサリーと呼ばれていた地域がロンドンに組みこまれていったためである。今日でもテムズ川南岸のロザーハイズ(Rotherhithe)には Surrey Quays (かつては Surrey Docks と呼ばれていた) という地名があるし、サザークとロザーハイズの間あたりにも Surrey Square という広場が存在するが、これらはこの一帯がサリーの一部だった時代の名残だろう。

ると合計で二十万人もの人びとがみんな逃げ去った計算になる。でもこの点はまた後で話そう。ただこれに関して次のことを述べておく。すなわち、こんなふうに二軒の家を管理というか世話している人たちは、自分の家の誰かが病気にかかったときには、家の主人が調査員か他の役人に知らせる前に、この手の面倒を見ている別宅に病人以外の残りの家族を、子供だろうが奉公人だろうがお構いなく送りこんでしまい、そのあとで調査員に病人を報告し、一人か数名の看護人を任命してもらうのが当たり前だった。さらに別の人にもお願いして、病人たちと一緒に家にこもり（お金を払えば引き受けてくれる人はたくさんいたんだ）、病人が死ぬようなことがあれば家の面倒を見もらうことにしていた。

これは数多くの場合、一家をまるごと救ってくれた。もしも病人と一緒に閉じこめられていたら、全滅は避けられなかったはずだ。しかし他方で、これは家を閉鎖することの不都合をさらに物語るものだ。閉鎖を心配し、怖れるために、たくさんの人びとがほかの家族と一緒に逃げ出した。しかし、公表していないし、症状が重くなかったといっても、この人たちは疫病に冒されていた。しかもこの人たちは、外を歩き回る自由を妨げられることはなく、それでいて病状を隠さねばならなかったために、ひょっとしたら自分たちも知らなかったのかもしれないけれど、このあとでさらにお話しするように、他人に疫病をうつし、おぞましい形で感染を広げてしまったんだ。

(東京大学准教授)